

## ■ 学会展望

### 緑香るトスカーナの丘にて —第3回シエナ京都シンポジウム報告—

浜本 光紹  
(京都大学大学院)

今年の7月4日から7日にかけて、シエナ大学と京都大学の間でシンポジウムが開催された。これは、両大学間の学術交流を推進するために2年に1度、シエナと京都において交互に催されているもので、第3回に当たる今年はシエナで開かれた。シエナは、イタリア中北部のトスカーナ州にあり、フィレンツェから南西へ向け列車で約1時間半のところに位置する。

私は幸運にもこのシンポジウムに参加し研究報告を行う機会を得た。私事ではあるが、実はシエナを訪れるのは今回が初めてではなかった。昨年一度訪ね、その落ち着いた古都の雰囲気が入り、いずれ再訪したいと思っていたのであるが、このような形でそれが実現するとは夢にも思わないことであった。

シンポジウムは、経済・法・人文・科学の4つの分野におけるセッションで構成されており、経済のセッションはシエナ大学経済学部の建物内にある会議室において行われ、景気循環論、経済学と環境、ゲーム理論とその応用、そしてその他のトピックの4つの分野に分けられていた。京都大学からは、今井晴雄教授、有賀健教授、そして大学院生である私の3名が参加し報告を行った。今井教授は、企業による技術ライセンス行動を逐次交渉ゲーム (sequential bargaining game) として設定し、そのサブゲーム完全均衡の特徴に関する分析を報告され、有賀教授は日本企業のマークアップ率が procyclicality を示すことを見いだした実証研究を報告された。その他、興味深い報告としては、ウィーン工科大学の準教授であるベーム氏は、量的拡大を表す成長指標と質的

向上を表す発展指標をそれぞれ縦軸・横軸にとり、各時点の経済状態をその表にプロットすることで経済の構造的・技術的变化をとらえる試みを紹介された。ちなみにベーム氏と京都大学の3名は食事などの時間で行動を共にすることが多く、氏には語学力の未熟な私との会話に幾度かつきあっていただいた。

「経済学と環境」のセッションにおいて、私は1970年代の日本の公害対策について、直接規制と補助金政策の組み合わせられた政策と企業の技術的対応の成果と限界、及び今後の環境政策の展望に関して報告を行った。このセッションでのチェアマンは、かつて青木昌彦氏とともにラディカル・エコノミクスを主導したサミュエル・ポールズ氏が担当された。報告の内容に関しては、氏や討論者から統計資料の計測などに関していくつかの質問が出され、有賀教授と今井教授のサポートを受けながら何とか返答したのであるが、相手に納得していただけたかどうかは不安なところである。

この環境に関するセッションには、シエナ大学の院生と思われる人々など、経済学の他のセッションよりも多くの参加者がいた。これは、環境経済学はここでも人気があるためか、このセッションのシエナ側の報告者であるヴェルチェーリ教授の人気によるものか、あるいはその両方によるのであろう。

ヴェルチェーリ氏の報告は、"Sustainable Development" (持続的発展) の概念を操作可能な形に定式化するという試みに関するものであった。氏は、将来世代の効用関数を特定化する新古典派的手法を批判して、将来世代の選好を現代において知り得ない以上、将来世代のために選択肢を減少させないことが世代間衡平において重要であると述べられ、その選択肢は、単に量的な意味だけでなく、「多様性」が確保されなければならないとし、そしてこの制約条件の下で代替的政策の評価を行うべきであると主張された。この報告は、A.センの衡平性の概念や M.ヴァイツマンの多

様性の定式化を用いて持続可能性の指標を提示しており、持続的発展の理論化に関する興味深い視点を投げかけていた。

私の報告は日本の公害対策の経験を解説したものであったので、その反応としてイタリアにおける環境問題について何らかの話が聞けることを若干期待していたのであるが、残念ながらその機会を得ることはできなかった。イタリアでもローマなどの都市部では自動車が多く、大気汚染は深刻な問題となっているものと思われる。ただ、イタリアでは（というよりヨーロッパの主要国では）歴史的建造物や景観の保全においては徹底しているようで、シエナでも城壁内への自動車の乗り入れは厳格に規制されている。また都市化されていない城壁内部の町並みばかりでなく周辺に広がる田園風景も非常に美しく、中心部からバスで25分ほどのところにある宿舎の付近では、季節はやや遅れていたが蛍をみることができた。大学の建物も、外壁は旧来の伝統的風情を残しながら内部は近代的仕様に仕上げている。シエナという街には深い思索に耽って理論的研究に従事するにはうってつけの環境がそろっており、逆に京都では頻発する景観問題や都市問題など具体的事例を直視する研究にとっては刺激溢れる街ともいえる。然らば、学者の研究スタンスにあわせて研究環境にも「多様性」があって当然なのかもしれない。

このシンポジウムにおいては他にもいろいろと思うところがあったのだが、それを書き留めるだけの紙面がないのは残念である。ただ最後に、今回の経験は私にとって今までにない知的刺激を与えるものであったことを付け加えておきたい。